止まない雨

如月睦月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
止まない雨

【Ｎコード】
Ｎ１２８２Ｌ

【作者名】
如月睦月

【あらすじ】
一人の少年は、ただ過ぎていく日々に諦観していた。一人の少女は、辛苦の毎日に、救いの手を望んでいた。交わるはずのない二人の運命は、ほんの小さな出来事によって変わる。人は人を救えるのか。止まない雨は、降り続く。

1／彼女は悪くない

群集心理という言葉があるけれど。それが何の、どういった学問か何かに出てきたのかさえ、俺は知らないが。

知っていて忘れていたのかもしれないが。

読んで字の如く、そのままの意味なのだろう。

群れる集まりの、心の理。心理というくらいだから、それは恐らく人間にのみ適用される言葉だろう。

人は一人では生きられないと言う。ならば二人なら生きられるのか。それとも、二人だけでも、人間は生きていけないのか。

自分はこれから生きていく中で、一体どれだけの人間と関わっていくのだろう。

「おい、お前。何で下着つけてきてんだよ。ざけんなよ、マジ殺すよ」

「うわ〜、何で。昨日言ったじゃん。お前明日はいてくんなって。何でだよ、何でだよ」

「はあ、マジない。死ねよ、今日それなかったら学校こねえっての。来なきゃよかった。チョーだる」

「奴隷が下着つけてんじゃねえよ。……じゃあこうしようぜ。今から男子トイレ行って脱げお前。なあ、そうしよーぜ」

お、いいね。賛成賛成。おら、立てよ。行くぞ、さっさと立てこら。

多勢が一人を追い込むような、容赦の全く感じられない言葉。そこには相手を気遣うような配慮などは皆無であり、一方的な敵意と……玩具で遊ぶかのような悦楽のみがある。

「……そ、そんな」

それは絶望に満ちた悲痛の声だった。

自分に降りかかる悪夢のような悪意に、どうすることもできない。されるがままに蹂躙され、これ以上ない程の屈辱。

「おら、お前が悪いんだろうが。お前自分で言っただろ。明日はいてこないって。言っただろうが。自業自得だっつうの」

「そうそう」

少女を取り囲む集団の一人が、少女の手を強引に取って立たせる。その際、少女は本来弱者である女性特有の、「きゃっ」というような悲鳴を上げるが、それにかまう者は誰もいない。

はい御一人様ご案内〜。行き先は男子トイレ。連れてけ連れてけ。早くしろ時間なくなる。分かってるよ。

女性はなす統べなく集団に身体を拘束され、教室の隅からドアの方へ連行される。

教室内にいる他の人間は、その一部始終を観察してはいたが、自分

から関わろうとはしない。

当たり前だ。

皆自分が可愛いのだ。……それに。

こいつら楽しんでやがる。

朝のＨＲ前の教室には、クラスメートはまだ半分ほどしか登校してきていないが、その中には少女を助けようという者は誰もいない。

男子女子ともに半分づつくらいだろうか。特に男子生徒が、……少女を辱めるいつものグループではない他の男子生徒は、それでもその毎日の恒例である光景を、どこか楽しげに眺めていた。

醜悪な笑みで、その口を歪めて笑っている。

……他人の不幸は楽しい。自分とは関係ない場所で、誰かが苦しむのは、自分がそうではないのだということを実感させてくれる。

そして彼等にとってはそれだけではない。女子高生という人間として相応である、女性として成立しつつある少女が、時には嫌らしく、時には恥辱にまみれた目に合わされるのを見るのは快感だ。

まだ性行為に及んだこともない者が多いだろう。日常では不足する性の欲求を、こうして間接的に満たす。傍観という名の共犯者達だ。

いじめを止めない奴も、いじめに荷担したのだと皆言うが、そんなことを言う奴は、その場に居合わせた全てのそういった行為に対して、同じようにできるのだろうか。

この国の人間は皆そうだ。あいつはやってんのに、何で俺は駄目なんだよ。お前もそうするなら、俺もそれにしよ。

横並び主義。みんなで渡れば怖くない。圧倒的大多数から外れたくない。

俺自身がそうではないとは、言わない。

現にこうして、目の前で起きた全てを傍観していたこの俺が、一体何様のつもりで何を考えているのだろうと思ったが……まあそれはいい。きりのないことだ。

何かを考え続けていれば、その人間は死ぬまで考えていなければならない。

無難に、朝一番目の授業の準備をする。火曜日の一時間目は保健体育の時間である。……彼等がそれを見越してまで、先程の陵辱を仕掛けたのかまでは、分からないが。

ふと窓の外を見る。今日は曇りだ。後に晴れることも降り出すこともないという予報である。傘が邪魔にならないだけ、雨の日よりはましという天気だ。

自分のこの教室での位置は、窓際後ろから三番目という、無難な場所である。

自分のこのクラスでの立ち位置は、あまり友人がおらず、いつも独りで隅で本を読んでいるような、ぱっとしないものだ。あの少女とは、似て非なるキャラクターである。

巳波凪、という。先程連れていかれた少女の名は、ミナミ、ナギという。

背丈は一般的な女子高生の平均を僅かに下回る程度か。しかし容姿はその比ではないだろう。

整った小さな顔。綺麗なラインを描く目鼻立ち。くりくりとした、可愛らいしく覗く２つの瞳。

髪の毛はセミロング。校則通りに黒髪であり、あまり手はつけられていないようだ。

といったような、それなりの美人なのだが、彼女はあまり笑顔でいることはない。彼女に現在進行で起きている辛苦を思えば、それも仕方のないことか。

高校二学年。進級して一ヶ月程で、彼女の運命は決まった。

異常なまでの人見知り。何をするにも行動が遅く、要領が悪い。

あっという間に周囲でグループが出来ていく中で、彼女は孤立していく。

それだけならまだいい。友人を作らず、一人で過ごす高校生活という選択肢ものこっていただろう。

……しかし彼女には、それさえも許されることはなかった。

クラス内での不良グループに目をつけられたのだ。地獄の日々は、始まった。

まず彼等は、慎重に行動した。

彼女のクラス内での行動を計り、彼女という人間性を計る。

例えば彼女が、誰かから危害を受けたらどうするだろう。助けを求める相手がいるだろうか。

それとも、周囲の人間が、それを止めるだろうか。

教師は、友人は、……両親は。

始まりは些細なことからだった。

新学期も半月という頃、周囲のグループが完全に固まり、彼女の孤立がいよいよ際だってきた頃。

それは起きた。

登校してきた彼女の机に、チョークで落書きが施してあったのだ。白い線で、一言。

ブス、と。

カタカナで二文字。馬鹿馬鹿しい程に、くだらない。単純で、ありがちなその二文字ではあったが……彼女の脆い精神は、人から受ける敵意を緩和できない。

まともに受けてしまった。深く傷を負い、次の日……彼女は学校を休む。

それを見た、落書きの犯人……犯人達は思う。丁度良い獲物じゃあないか、と。

面白い、と。

彼女のクラス内での立ち位置は、そうやって決定した。

底辺も底辺。最下層に落ち込んだ。

言葉による暴力は日常。陰湿な嫌がらせは、毎日。彼女の持ち物で、一週間と無事であった物があるだろうか。

標的が男子生徒なら、そこで終わっていたのかもしれない。

しかし彼女は、女性である。男子からすれば、年頃の異性。嫌がらせは、次第にそちら側へと悪くなっていく。

彼女にとって、不幸なことに……彼女の身体は、女性らしい成長を順調に済ませていた。

その一人の女の子は、複数人の悪意の捌け口にされることになる。

……可哀想というよりは、運がないと思う。

いちいち他人のことを可哀想だなんて感じたところで、それでその人が救われるわけではないのだからと、彼女に対してとは限らずに、自分はそう思うようにしている。

可哀想ではなく、運がない。

彼女は悪くない。

彼女の運が、悪かっただけなのだから。

2／無関係が、関係に変わる境

彼等が、彼女を伴って戻ってくる。教室の扉が開き、彼女を先頭にして入ってきた。

一瞬クラス中の視線が集まるが、それはやはり一瞬のことで、しかし皆……どこか横目で伺っている。

特に男子生徒。理由は分かるというものだ。先程の彼等の会話からすれば……

彼女は、妙に神経質な動きをしていた。まるで、少しの間違いで何かが崩れ去るのを恐れているかのような。

その手で自身の身体を庇うようにしている。右手を胸に添え、左手を下半身に添えていた。

心なしか、その表情に朱が刺している。

……おいおい、マジかよ。

後ろから共に入ってくる彼等は、誰もがその顔を邪悪な笑みで歪める。

それぞれの席に戻っても、その視線は一斉に彼女を向いたままだ。

彼女は慎重に自らの席へと腰を下ろす。その際、その右手でプリーツスカートの裾を抑えるようにして、座った。

その一瞬に、誰もが注目する。あわよくば、そこに何が見えるのだ

ろう。

あいつ、やばくねえか。奴らも、度を越してる。

こういうのは、回を重ねる毎にエスカレートしていくものだ。

……自殺、するかもな。

今の世の中、そう珍しいことでもない。

日々世間を賑わせるニュースでは、その殆どがそういった事件で占められている。

いじめを苦にして自ら命を絶つ。

テレビ評論家や、ニュースキャスターが、「どんなに辛くとも自殺は絶対にいけない」

もっともらしくそう言ったところで、その当事者からすれば、そんな言葉は他人事だ。

お前らに何が分かる。お前に私の苦しみが分かるものか。

死が唯一の救いなら、それにすがってしまうのは、誰にも責められない。

そこで授業開始のチャイム。まるで合わせたかのように、黒板側のドアを開けて入ってくるのは体育教師。

二十代半ばの、スポーツ刈りの男性教師。彼が保健体育の授業も兼

任している。

少し遅れたことを、詫びながら授業の準備を始めた。

この授業は例え寝ていたところで、成績に影響はない。保健体育という分野が、大して複雑でも難解でもないのか、彼の評価が甘いだけなのかは知れないが。

教師達の中には、このクラスの事情を理解している者も少なくない。それもその筈だろう。これだけの人間がいるのだから、全てが隠し通せるわけがない。

……それなのに、この状況が一向に回復の兆しを見せないのは、事態の深刻さを表していると言えよう。

この男性教師は、その中でも事情を知らない種類に分類される教師だった。

体育や保健の授業以外には、関わりがあまりないということもある。

理由もなく、巳波凪の方を見てみた。

彼女の席は、教室の中央寄りに位置している。

都合の悪いことに、嫌がらせグループがその周囲に散らばっているのだった。

これに関しては、彼女は自分の出席番号を恨むしかない。

彼女は教科書を机に並べながらも、それには目もくれていない。そ

んな場合では、彼女はないのだ。

その左手は、未だにスカートを押さえている。比較的短めの、膝上までのスカート。

連鎖する不幸なことに、この学校の女子の制服は、調整が効かないタイプのものだ。

前からの視線に常に注意を怠れない彼女は、少しの物音にも敏感に反応していた。

周囲にペンを走らせる音。紙を擦る音。教師が室内履きで鳴らす足音。

その度に自分の姿を確認する。夏服は、彼女の身体のラインを際だたせていた。

……冬服なら、まだ良かったな。

その後ろでは、グループの中の二人が、自分の鞄に何かを隠すようにして見せ合っていた。

他のメンバーにも何やら意味深な視線を送っている。

……あれ、どうするんだろうな。何に使われるのか。どうせ、更なる陵辱だろうが。

恐らくあれは、予想通りのものだろう。

同情さえ、湧いてくるというものだ。

彼女の表情は、今にも崩れそうな弱々しいもの。耐えているのが、不思議な程だった。

やがて彼女は、俯いてしまう。黒髪が彼女の表情を隠す。

……そんな仕草に、自分の中で何かを感じた。

何だろう。このよく分からない、曖昧な……言葉で、説明しにくい感情、か？

そんな思考が頭を過ぎるが、長く考えることはしなかった。

考え続けていれば、止められなくなる。

頭を振って、余計な思考を追い払った。

止めろ。感情移入することに意味なんかない。他人の責任まで、考えられるか。

冗談じゃない。

彼女がどうなろうか、知ったことじゃない。この先どんな過酷な運命が待ち受けていたところで、俺には関係ない。

全て他人事だ。俺は彼女を救えないし、救う気もない。

勝手にすればいいのだ。生きるも死ぬも、彼女の自由。生きて耐えるも良し、死んで逃げるも、構わない。

死ぬことが無責任なんて、自分は思わない。人間は、完璧な生物ではないのだから。

欠陥だらけだ。だからこそ、こんな光景が存在している。

こんな光景が、現実だ。人は自分の為ならば、共食いのように人を傷つける。

……しかし、そんな彼女の哀れみさえ出てくる背中に、何かよく分からない感情が割って入ってくる。

何故だ。どうしてこんな、こんな。何だよ、自分はどうしたのだ。

おかしい。何かが変だった。残る違和感。拭えない悪寒。その源は、どうやら彼女だ。

自分は、どうしてしまったのだ。

今まで、こんなことはなかった。同じクラスに入っても、彼女と会話したことはない。ただの一言も、交わしたことはない。

時間だけが過ぎ、既に固まっているクラスの関係図に、俺と彼女を繋ぐ矢印はない。

それを今更、何があるというのだ。

無関係の前に、無関心。向こうだって、俺の名前と顔が一致するかどうか。

内気な少女と、陰気な少年。同類項ではあるかもしれないが、一緒

に括られることはない。

そしてそれは、この先もその筈だ。お互いに言葉の一つも交わさず、きっと彼女は……俺に自分のフルネームを知られていることさえ、想像もつかないだろう。

想像するしないの前に、思いもしないだろう。俺という存在は、彼女にとってはただの風景だ。

登場人物でさえ、ないのだから。

俺にとっての彼女がそうであるように。

そうである、筈だったのだけれど……

まだあたりに学生が残る放課後。午後の授業が終了し、ＨＲを終え、下校しようと下駄箱の側まで来て気づく。

……ポケットにあるべき感触が、ない。

溜め息と共に、頭に手をやる。どうやら携帯電話を、机の中に置いてきたらしい。

しまった。これでは取りに戻る他ない。俺は歩く足を止め、方向を変更。

来た道を戻るように、再び教室を目指す。もう一度階段を往復しなければならないのが、憂鬱だ。

そして教室に到達し、前の扉を開いて入る。すると、そこには……
一人の生徒だけがいた。

必死に身を屈め、何かを探すように視線を机の中や、その横にかかった鞄などの中身を物色していた。

彼女は、そこでようやく俺の姿に気づく。

「っっ！？」

3／弱さの中に、綺麗なもの

「っっ！？」

彼女は、そこで初めて俺の存在に気づき、意表を突かれたように、驚愕の表情を浮かべ、次いで身体を庇うように押さえた。

床に這い蹲るような体制でいたためか、多少に衣服が乱れているからだろう。

それに彼女は、今は……恐らくまだ……

「……」

していた作業を止め、こちらを向くもその先が出てこない。彼女はただ、ただ俺を見つめて戸惑うばかり。

今にも崩れてしまいそうに、崩れそうな身体を支えるように、弱々しい目をしていた。赤い目。

二つの瞳は、赤くなっていた。

断続的に鼻をすするような音をさせ、その赤い瞳を拭いながら黙々とそれを探す彼女の姿を、つい想像しようとして思い止まる。

「……なに、してんの」

それは本当に、本当に残酷な質問だった。彼女が何の為に、どんな思いでそうやって地面に這うような目に遭っているかなんて、分か

りきっている筈なのに。

彼女からしてみれば、俺にそんなことを聞かれたくなんかないだろう。

当たり前だ。彼女が探しているものは、彼女からすれば異性である俺には決して知られたくないものの筈だからだ。

教室での一件を見て知っている筈の俺が、そんな問い掛けをなぜしたのか。理由なんてない。

理屈なんてない。彼女に話しかける為のきっかけならば、何でも良かったのだ。

彼女がそれに返してくれる問い掛けならば、どんなものでも。もっとくだらない質問でも良かっただろう。

「……」

しかし彼女は、一向に沈黙を続けるばかり。その口を開くことはない。

「……多分、そこにないぞ。ていうか、ここにはないだろ。奴ら、簡単に手放すわけねえって」

核心を突いた。

彼女だって、分かっていたことだろう。そんなことは、分かりきっていたことだろう。

分かっていたところで、彼女にはどうすることもできなかっただろうけれど。彼女に何ができるとも思わないけれど。

そして……

「……うん」

彼女が、初めてその口を、開いた。言葉を、紡いだ。

「うん……」

「うんって……」

ならば、彼女はどうして未だにそんなところで這い蹲っているのだろう。

「じゃあお前、なにしてんだよ」

彼女は、絞り出すような表情になって、言った。

「……あんた、何？」

「……何って、それは……」

「あんた、私の何よ。どうしてあんたなんかに、そんなこと言わなきゃいけないの？　うるさいわね、話しかけ、ないでよ」

意表を突かれたのは、今度はこちらの方だった。

その言葉は、今にも萎れそうな中にも、周囲に埋もれない強さがあ

ったのだ。

普段の彼女を、教室で見て知っている俺からすれば、それは驚くに値するものだった。

人見知り、地味、内気。それらが彼女を端的に表す言葉であった筈なのに。

今の彼女の言葉と表情は、それとは程遠い。

「え、あ。その……」

そんなギャップに、返す言葉が見つからない。

自分はどこかで、彼女を見限っていたのかもしれない。

内気な少女。虐げられる少女。何をするにも行動が遅い。

ならば、自分の方が優れているのだろう、と。心の何処かで安心さえしていた。

自分よりも下の存在を確認し、満足する。人間の習性だ。

それなのに、彼女は今。俺に噛みつくような視線を向けている。

「……あは、あんた。なにその顔。私が、そんなこと言っちゃおかしい？　もっと、弱々しい女の子だと、思ってた？　冗談言わないで。人に勝手な想像押し付けないで」

彼女は、鋭く尖ったような……辛辣な言葉。そうすることで自らを守るように、使う。

「自分の考えを、一方的に押し付けるなんて、吐き気がするわ。やられた方はたまったものじゃない。あんたに、私の何が分かるっていうの？」

「……言いたいことは、分かったけどさ」

やられっぱなしは、いい気がしないので、彼女が反撃できない方法で迎え撃つことにした。

「その格好じゃあ、説得力ない」

彼女は、殊更に自身を抱きしめるように庇う手を強くした。これは効いたようで、その表情はどこか弱いものへと変わっていく。

「……うう、え……えっち…」

「……お前、どうすんの。ずっとここにいるわけには、いかないだろ。家、帰らないと。まずいだろ」

「分かってる。そんなこと。仕方ないから、もう、帰るわよ。……帰るしか、ないもん」

彼女は、弱く言った。

弱音というものは、どうでもいい相手と、聞かれても大丈夫な相手にしか吐かないと言う。自分の弱い部分を、簡単にさらけ出すよう

なことは、普通はしない。

なのに今彼女は、俺に弱さを見せている、のか。

改めて彼女を見る。本当に、綺麗な顔をしている。この顔が笑ったら、どんな笑顔になるだろう。彼女に嫌がらせをする奴らは、そっちの方には、興味がないのだろうか。

きっとその方が、皆幸せになれるだろうに。

彼女の笑顔を、想像しようとして失敗する。

うまくいかない。それは自分が、まだ彼女のそんなところを見たことがないからだ。

そんなのは、悲しすぎる。

「一緒に、帰ろうか」

「え、……え、一緒って、何で」

「いや、その格好じゃ、家まで辿り着くのも大変だろって。ほら、これ着ろよ」

そう言って、自分の上着のブレザーを差し出す。彼女に差し出す。

不思議に思った。自分は、彼女を救うことはしないと決めていた筈なのに。救うことなんて、できるわけがないと思っていた筈なのに。

今自分がしているのは何だ。どうしてしまった。お前は、どうして

しまったというのだ。他人なんて、救う必要があるのか。その責任を、負えるのか。

手を出しておいて、途中で止めるとか、無理なんだぞ。

人間関係は、ゲームとは違う。リセットはきかない。

「……あり、がとう」

彼女は、それを受け取った。そして羽織る。夏服のブラウスの上から、ぴったりと。

それでも、スカートは押さえたまま。下は仕方ないだろう。上半身の警戒が減っただけ、それはましというものだ。

彼女はようやく、安堵の顔になった。しかしそれは笑顔とは違う。マイナスだったものがゼロに戻ったような。

「あなたは、どうしてそんなことを、してくれるの」

彼女は、疑問。当然の疑問。人は、意味の無いことはしない。それは、無駄だからだ。疲れるだけのことは、しない。

意味、理由。それをする、理由。

俺は、なぜ。……なぜ、か。

「別に、何となくだよ。通りすがりの善意だって、思ってくれていい」

意味のあることが全てじゃあ、ないだろ。

そんな風に言うと、彼女は戸惑いながらも、納得したようになった。

そして、一瞬目が眩んだ。貧血のような、乗り物酔いみたいな感覚が襲ってきて、それはなぜかと考えるのも、一瞬。

それは、すぐに明らかになる。自明の理であった。簡単だ。

彼女が、笑ったのだ。その端正のとれた人形のような顔を、笑顔にしたのだ。

太陽というよりは、月。月が輝いたような、どこか薄暗い笑み。妖艶な笑顔。

それは、とても綺麗で、引き込まれた。

弱さの中に、美しさを感じる。儚いながらも、それは息を呑むほどに綺麗で……

一目惚れというのは、迷信ではないということを、俺は知ったのだった。

4／神様は、一体何をしているのか

「サイタ？　ああ、斎田ね。斎田って言うんだ。そか、私知らなかった」

「……もう7月に入ったぜ。同じクラスの人間の、名前くらい知ってろよ。お前」

すると彼女は、拗ねたようにそっぽを向き、無表情をつくって言った。

「……そんなの、そんなこと、言わないでよ。そんな、余裕なんて、…」

俺は、考えて思い直す。彼女には、そんな余裕はなかったのかもしれない。そんなことに思考をさいている場合では、なかったのかもしれない。

人は、貧窮しているときに、自分とは遠いものに対して思考を向けられない。

余裕があって初めて、人はくだらないことを考えだすものだ。明日にも死にそうな人間が、冗談なんて思いつかないのだ。

自分に起こっていることで既に、余裕なんて使い果たしている。

ならば彼女は、やはりそうなのだろう。

「……悪い。それじゃあ、仕方ないよな。無理もない、か。まあで

も、じゃあこの際覚えといてくれよ」

「うん。私の名前は知ってる？　巳波っていうけど」

「……知ってる」

「ミナミって変な漢字だよ。十二支の……干支ね。蛇のことを、巳って書くでしょ。それに波で巳波」

「それも、知ってる」

すると彼女は、意表をつかれたようになって返す。

「あれ、知ってたんだ。聞いただけじゃ分からないと思ったけど、そっか……」

彼女の名前が、黒板中に、至るところに殴り書きされるという、嫌がらせがあったのだ。

珍しい苗字。人より変わっているというだけで、外れているというだけで、起こる差別や迫害。

それは別に身近なことに限らず、世界中で起きていることだ。人種、性別、性格、外見。肌の色や、生まれの違い。

こんなときに人間は、決して平等なんかではないということを思い知らされる。

平等というのは、皆同じということだ。何一つ変わらないということだ。

そんなものは、気持ち悪い。人は、皆違いすぎている。

「まあいいけど、家、どこなんだ？　大体の方向とか、教えてくれないか。じゃないと、歩き辛いからさ」

「駅の方だよ。マンションに、一人暮らし」

……一人暮らしということは、上京してきたのだろうか。

両親、家族と離れて暮らす彼女は、何か困ったときに頼る相手がいるのだろうか。

「一人暮らし、かよ。それって、大丈夫か……」

「もう馴れたよ。最初は、少し寂しかったけどね。けどそうじゃないにしても、いずれは皆、一人でしょ」

「まあ、そうかもしれない」

いずれは一人か。そうだな、そうだ。

いや……いつも独りだ。

人間はいつも独りだ。

俺達はあの後、誰もいない教室を後にし、彼女の自宅まで送ることにした。

長引いていた梅雨だが、今日は雨雲が一休みしているかのような、

1日だ。雨が降らないだけで、空が晴れ渡っているわけではないけれど。

俺の隣を、いそいそと一瞬に歩く彼女。巳波凪。その肩には男子用のブレザーが掛かっている。

それは俺が貸したものだ。

彼女はそれでも、自らの姿をちらちら伺いながら、周りを伺いながらの歩きをしている。

「……あの、ええと……斎田、は。斎田は大丈夫なの？　この後用事、とか」

気遣いのような、言葉。彼女は、誰かのことを心配できる人間だった。

それは本来無関係なはずの俺に対して、少なからずの罪悪を感じてのことだったのかもしれないが。

「……暇だよ。家、誰もいないし」

「一人暮らし、なの？」

「いや、滅多にいない姉貴だけ。だからまあ、でも一人暮らしみたいなもん」

「……そう」

誰にでも、人に言いたくない事情はある。知られたくないことがあ

る。

どんなに親しい家族であれ、友人であれ、自分の全てをさらけ出すのは怖いのだ。

全てを見せて、そして拒絶されたときのことを考えてしまう。どうしても頭を過ぎる。

救いを求めて、それを突き返されたら……どうすればいい。

「……まあそれはいいや」

革靴の乾いた音を響かせ、二人は歩く。方向としては駅前に向かっているので、徐々に喧騒が高まっていく。

高校の授業が終了する時間帯ということもあって、辺りには他校の生徒達の姿もあった。

男子同士で集まりながら、最新のテレビゲームについて話し合う者達。耳にイヤホンを付け、音楽を聴きながら一人で歩く者。

中には男女で二人、手を繋ぎ合っている光景も少なくはなかった。

……俺達は、周りにどう見えているんだろう。

見ようによっては、異性同士の関係を連想する者がいてもおかしくはないのではないか。

……だったらなんだよ。そこで思考を切る。

「……」

見ると彼女は、周囲への警戒心を先程までよりも強くして、殊更に神経質に歩いていた。

どうしたのだろう、と考えて思い至る。

人か。人が多い。……失敗したな。

駅前に向かって大通りを進む内に、周囲を見渡せば人で溢れかえっていた。

休日の都会と言わないまでも、それは彼女の異質な服装が目立つには充分過ぎた。

男物のブレザー、今はまだそれほど暑くはないとは言え、もう初夏である。

彼女は、すれ違う人達に、度々視線を向けられていた。

……もっと人通りの少ない道を選べばよかっただろうか。

そう考えて、そして決心。少しの思考の末、たどり着いた答えを実行に移す。

「……えっ、ちょっと」

「いいから、こっち」

彼女の手を取り、方向を逸れて裏道に入る。そこは狭い路地になっ

ており、ここからならすぐに道を折れれば、遠回りをすることもないだろう。

「……あり、がと」

「……別に、いいよ」

彼女は、俯きながらそう言った。

ここからは見えないが、きっと悔しさを滲ませた瞳をしていることだろう。

前傾し、表情が前髪で隠れてはいたが、それが俺には、何となく分かった。

自分だけではどうにもならない、そんな境遇が、どれだけ辛いか。どれだけ苦しいか。

どんなに悔しいか、俺は知っている。

だから分かった。

「ごめんなさい」

「……」

謝らなければならない理由なんて、ないだろうに。彼女は、謝る必要なんてない筈なのに。

そう言わなければならない彼女の気持ち。そうせざるを得ない状況

に置かれた彼女の心情。

人間は、追い詰められると余裕がなくなる。

追い込まれると、余裕をなくし、思考に支障を来す。

彼女は、これから先もずっとこうなのだろうか。虐げられ、辱められる、奴隷のような人生。

それは一般的な一女子高生とは比べるべくもない程に、差の開いたもの。彼女と同年代の少女なら、彼氏の一つでもつくって青春を謳歌することも決して早すぎることもない。

人生の中で、一番濃密な時期であるはずなのに。

彼女は、今止まない雨に降られている。

何時まで経っても、止まない雨。待てども待てども、降り止むことのない。

時が経つに連れ、その勢いは増すばかり。冷たい雨が、彼女を濡らす。

体温を奪われ、人の温もりを失い、マイナスの感情を常に背負い、終わりの見えない、光の見えない道。

また一年過ぎて、クラス替えがあれば彼女は救われるだろうか。

それとも、偶然すらも、運命すらも、彼女を助けてくれはしないのか。

いや、それでなくとも、クラスという小さなくくりが変化した所で、彼等は彼女を逃しはしないかもしれない。

そんな低い壁は、彼等は嘲るように踏み越えるだろう。

いくらでも、方法はある。人が人を傷つける方法など、いくらでも。

彼女が初めて俺に放った言葉。弱々しくも、辛辣な言葉。あれは、彼女の精一杯の抵抗なのだ。

彼女は、誰にも隙を見せるわけにはいかなかった。

きっと、望んで使った言葉ではなかっただろう。

「勝手な想像を、押しつけないで」

「吐き気がするわ」

「あなたに私の何が分かるっていうの」

どれも毒気のない言葉だった。使い慣れないことがすぐ分かる、言葉だった。

しかしそうせざるを得なかっただろう彼女の心情を考えると、それも分かりそうなものである。

目の前で打ちひしがれる彼女を見て、思った。

救いなんてものは、存在しない。神様なんて、やっぱりいないのかもしれない。

5／鬱の中

騒々しい程に耳につく雨音。梅雨はやはりまだ、去ってくれる気はないらしい。

昨日の一休みは、溜めに溜めたその分を、今日一気に放出するためだったのかもしれない。

傘が役に立たない程の強い雨。季節からして、凍えることはないが、それでも雨の日は憂鬱。

濡れて張り付いたスラックスは、歩く度に不快を感じさせた。

「来たぜ」「ああ」

そんな掛け合いが聞こえてきて、目をやってみれば、教室のドアが開く音。

そこから現れたのは、黒髪をなびかせた少女。

巳波凪。

彼女は、その視線に脅えながらも、それでも自分の座席を目指して進む。右手には傘。それを途中で傘立てに刺そうとして、そこで気づいたように踏み止まる。

彼等の醜悪な笑みが、その行為を嘲るように見守っている。

そのまま傘を手放せば、それが後に彼女の手に二度と戻ることはな

いだろう。

彼女の傘は、透明なビニール傘であり、ごくありふれたそんな傘が、一つ無くなっていた所で誰も気付かない。

……例え気付いたとしても、何が変わることもない。

日常の嫌がらせは、そんなくだらない些細なことであっても、積み重なればそれは本人にとっては苦痛なのだ。

彼女は傘を持ち直し、それを自らの机に掛けることにした。ようやく辿り着き、そして見る。

見つける。自分の机に、真っ白い線で何かが書き込まれているのを見つける。

しかし、それは書き込まれていると言うべきなのかどうなのか。埋め尽くされていると言った方が、あるいは正しいのかもしれない。

「っっ……」

そこに刻まれていたのは、悪意の罵詈雑言であった。彼女はそれを見て、打ちのめされたように呆然する。

「パンツ」「下着」「ブス」「ミナミ」「巳波」「死ね」「自殺」「帰れ」「淫乱」「変態」「自殺しろ」「バカ」……

それらの文字は、確かな敵意を持って彼女を傷つける。そんな犠牲と引き換えに、何人かの人間の、誰かを傷つけたいという欲求が満たされる。

いじめとは合理的だ。すべからく、それは理に叶っている。たった一人の人間を犠牲に払うことで、それ以外の複数の人間が潤うのだ。

だからいじめはなくならないのだと思う。大多数の人間にとって、全体からして、それはむしろプラスに値するのだから。

世界中から犯罪をなくせないのと、同じように。

彼女は、ポケットから出した　ハンカチで、チョークの文字を消し始めた。

懸命に擦るが、乾いたハンカチは、虚しくその汚れを広げるだけだった。

消えない。呪いのようだった。彼女の周囲から、悪魔の笑い声が漏れる。

複数の悪意の、視線が注がれる。

その中を、彼女は何時までも擦り続けた。何回も、何回も。

悪夢を振り払うように、何回も。

しかし、振り払えない。悪夢は覚めることなく、彼女を魘す。

そんなとき、ふと彼女と目が合った。視線がぶつかった。その悲痛な瞳に、助けて欲しいと叫んでいるように。

心の底の、声には出せない言葉を込めて。しかし……

彼女は目を逸らした。再び机に目を向ける。その時の、彼女の表情。

何かを諦めたような、何かを手放したような。

ここで俺に救いを求めれば、俺にも迷惑がかかってしまう。俺を巻き込んでしまう。

彼女に手を差し出すということは、彼女と共に雨に濡れろということだ。彼女と共に、手を繋いで歩けということだ。

いじめを傍観する一番の理由。それが身を守る一番簡単な方法だから。

それが人間。人間なのだ。考えることができる、人間の答えなのだ。

現に今、俺自身。

一部始終を見つめる俺自身の足。机の下で震えている。

それは悔しいからじゃない。武者震いじゃない。ただ怖いだけだ。

怖くて、怖くて。恐ろしいだけだ。今にも彼女が俺の名を呼ぶのではないか。

昨日二人で帰ったときに教えた、俺の名前を呼ぶのではないか。

やはりそのまま別れれば良かったかと。他人の線を超えなければ良かったかと。

彼女という人間の全てを背負う覚悟なんて、決めてなんかいないのに。

自分の身を危険に晒してまで、彼女を助ける気など、無い癖に。

馴れ馴れしくしやがって。馬鹿じゃねえか。ただ一瞬見とれただけで、そんなことをして。

取れない責任を、負うなんて格好つけて。彼女と話す時間を、夢見て。

自分だけが彼女を助けられるなんて意気込んで。

心の葛藤。腹の中で暴れまわる自虐心。後悔、そんな中でも、この場を切り抜ければ後でまた彼女と話せるかなんてことを、考えている自分に嫌になる。

……死ねばいい。

死ねばいい。あいつら全員死ねばいい。死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねば死ねばいい。

いち、にい、さん、しい、ごお、ろく、……

気がつけば、数えていた。彼等、彼女を虐げるいつものグループを……その人数を数えていた。

一人、髪の毛が茶色い。校則では、禁止されているが、彼等には関係ないことだ。

二人目、制服のYシャツの胸元をボタン三個空けて、それが自分を良く見せていると大きな勘違いをしている男。

三人目。後は、皆似たようなものだ。

死ねばいい。そうすれば、そうすれば元通りだ。

元凶さえなくなれば、いなくなってしまえば、彼女は救われる。

一人残しても駄目。そこからまた、悪意は増殖し、蘇る。

彼女は永遠に抜け出せない。悪意の罠から抜け出せない。

何時までも机を擦り続ける彼女から目を背け、自分は窓の外を見た。

降り続ける雨。予報では、当分止むことのない、雨。明日も明後日も明明後日も。太陽が照らすことのない悪天候。

心まで曇っているような気がして、心に雲がかかっている気がして、憂鬱になる。

暗雲たる気分とは、こういうことをいうのだな、と思った。

色んなことを言う、人がいるものだ。

それなら、人を傷つける人間がいたって、おかしくない。

誰も争わない世界など、実在しないだろう。もしもあったのなら、そちらの方が疑わしい。

嘘じゃないかと。偽物じゃあないかと、疑う。

だからこれは、仕方のないことなのだ。誰かの死を願うのは、不自然なことじゃない。

自分にとって不都合な存在の消失を願うのは、おかしいことではない。

人間なら皆やっていることだ。弱い者が、強い者に一矢を報いる為の唯一の方法。

願うことだ。呪いをかけるように、想像で人を殺す。

それにより、実際の半分の半分の半分でも、気が晴れるのなら、人はそうしてしまう。

あいつさえいなければ……。

雨は止みそうになく、それはまるで彼女の心の中にも降っているようだった。

降り止まない雨。終わらない悪夢。

彼女が一体、何をしたというのか。

前世か何かで罪を働けば、こんなことになるのだろうか。

もしそうだとしても、前世の自分に文句を言うことなど、できない。
自分はそこに見えない筈の、空を見つめた。雲に隠れて見えない太陽を見つけようと、必死に探す。
無理なことは分かっていた。意味のないことだなんて、知っていた。
ただ足掻いてみたくて。何か見えないものを否定したくて。
できないことだと分かっているのに。
そんなことをする自分は、どうしたのだろうか。
それも分からない。どうしたいのか、分からない。何をしたくないのかも、分からない。
とにかく、苦しかった。
救いを求めるように、曇った空を探し続ける。
そして考える。人が死ぬには、どんなことが必要か。
どんな要因が有り得るか。
交通事故。自殺。病死。自然死。死体、死体死体死体死体死体死体。
殺人……
心の中から、暗い何かがのぞき込んだような気がして、身震いする。

だが、気がつけば、足の震えは止まっている。

6／傷だらけの少女

誰もいなくなった放課後。部活やその他の理由でまだ校内にいる者でも、それぞれの場所に向かった後。

閑散とした教室。時間が止まっているかのような空間。ここだけが、まるで周りと切り離されたかのようだった。

彼女は、ようやく元通りとなった自らの机に突っ伏していた。表情が窺えない。泣いているのかもしれないし、笑っているのかもしれない。

それは分からなくても、確かに言えることは、彼女はもう限界だということだ。もう無理なのだ。大の大人でさえ、あんな仕打ちを受ければ精神がおかしくなっても不思議ではない。

それなのに、彼女は少女だ。十七才、女子高生。人間として、まだまだ成長段階。まだまだ成長の途中。

それなのに何だ。この地獄はなんだ。彼女が何をした。彼女が何をしたというのだ。一体何をしたというのだ。

もう彼女は、泣いてはいなかった。泣き腫らし、涙が枯れたといった方が正しいのか。

クラスのＨＲが終了し、皆が教室を後にしても、彼女は立ち上がろうとしなかった。

それを気にとめる者はいなかった。視線を向ける者はいても、自分

から関わろうとはしない。それはいつも通りの光景。

担任教師である、若い新任の女性教師は、これまでに何回か、このクラスでのそういった現状を問題に上げることをしたが、彼女はどうやら、自分のクラスでいじめなんていうものが起きているなんて信じられない……信じたくないのだというように、それを頑なに認めようとしない。

彼女は帰りのＨＲで皆を集めてこの問題を話し合うときも、いじめという言葉を使ったことはなかった。

皆さん、皆さんはもう高校生なのですから、自分でちゃんと分かっていると思います。間違っていること、正しいこと。その区別がちゃんとつくはずです。私は皆さんを信じます。皆さんが、それをできると、信じます。それが私の仕事です。

……呆れたことに、彼女はそれで全てが終わったと思っているらしい。

初めて受け持ったクラスで、初めてぶつかった問題を見事に解決して見せた。その達成感だけで既に終わってしまっているのだ。

自分という人間の有能さに陶酔し、現実をもう目に入れてすらいない。彼女は遅かれ早かれ、どこかで失敗する人間だと思う。

そこで独りきりで追い詰められている彼女の心の叫びが、聞こえないのか。きっと聞こえないだろう。

人は、誰かに聞いて欲しいことに限って、心の一番奥で叫んでいるものだ。

誰にも聞こえない。そんな心の奥底で。

俺は、そんな彼女の心の叫びが聞こえる場所にいる。俺だけだ。他には誰もいない。彼女は俺だけには、その全てを見せるようになった。

まだ俺は、彼女と長い時間をともに過ごしたわけではない。

深い絆を持ったわけではない。けれど、彼女はそんなことを抜きにして、やはり俺の前では強がらないのだ。

それはようやく見つけた隙を見せてもいい相手というのか。今まで緊張を続けてきた彼女の精神は、安らぎを求めて俺に寄りかかってくるのだった。

「苦しいよ……ぐずっ、嫌だよ……どうしてっ、私なのかな」

彼女は、自分の運命を呪うように、悲痛な言葉を口から漏らす。

俺はそれに、どんな言葉を返せばいいのか。どんな言葉なら、彼女は救われるのか。

そんなことは、とても無理な気がした。

どんな言葉も、その場しのぎの慰めにしかならない気がした。

「巳波……」

俺は、一人では何もできない。今すぐ奴らを追いかけていって、一人ずつ殴ってやることもできない。

喧嘩したことなんかないし、自分は体力に自信もない。あったとしても、そんなことは自分には無理だったろう。

こんなとき、漫画やアニメや小説や映画なら、正義の味方が颯爽と現れて、あっという間に彼女を助けてしまうのか。悪を倒し、弱きを救う。そんなお決まりのハッピーエンドを迎えてエンドロールが流れるのかもしれないが、これは現実だった。

残酷で無慈悲な、現実だった。残酷で、誰も助けない。

神様がもしいるのなら、この世界に戦争は起こらないという。それは本当にそうだろうか。神様の性格が悪いだけじゃないのか。

下で哀れに踊る、人間を見てほくそ笑んでいるのではないか。

俺は、一歩一歩ゆっくりと彼女に近づいていく。そして彼女の隣の席に腰掛け、俺も机に突っ伏してみた。

視界が覆われる。何も見えない、見えない。机の木の匂いがする。何故か懐かしい、そんな匂い。

そして、背中に温かい感触。驚いて顔を上げれば、彼女が椅子に座りながら寄りかかってきていた。

その綺麗な顔を俺の背中にぴったりとつけ、やはり見えない。

こんなことがあるだろうか。日夜ニュースで凶悪犯罪が報道される日常。こんな光景など、それこそ世界中で起こっていることだ。でもなんで、彼女なのだ。

分かりきったこと。それは彼女が弱いからだ。周囲に上手く取り入っていけないものは、淘汰される。もしくは俺のように、人間関係から排除されるかだ。

だが、それなら強い奴が正しくて、弱い奴が正しくないのか。そんな、そんなのは、余りにも残酷じゃないか。

彼女は、震えていた。その弱々しい震えが、彼女の体を通して伝わる。

そんな彼女に何もしてやれない。分かっていたつもりだったが、改めて自分の無能さを嘆く。

いじめが終わる時は、その相手との直接的な関係が切れたときだ。それ以外では難しい。嫌がらせというものは、千差万別。ほんの小さなことまで教師が相手していたら、いくら人がいても足りない。

ならば、ここで見えない涙を流す彼女は、救われないということなのか。

希望は見えてこない。一向に降り止まない雨。

明日は、彼女の机に何もされないという保証はない。

それに、この俺の肩に体重を預けてくる、小さな女の子は、明日にも、自分だけ安全圏から見下ろしているだけの俺に白い目を向けるかもしれない。

それを考えると身が震えた。そしてそんな自分にまた溜め息。

自分は、このままでも構わないと思っているのかもしれない。安全圏から見下ろしているというのは、別に間違いではなく事実かもしれなかった。

7／お願いだから笑って

傘をさして歩く。時折入ってくる風と雨に耐えながら、一歩一歩進んでいく。

昨日の雨で濡れた制服は無理やりアイロンし、間に合わせた。連日の雨は非常に面倒だ。

梅雨が明ければ今度は蒸し暑い季節が待っているが、それでもそれが待ち遠しい。

靴の中が濡れるのはどうやら、避けられそうにないらしい。本当に憂鬱だ。

とにかく、まずはいち早く教室に着くことだ。それに変わるものはない。

何とか高校の見慣れた門をくぐり、二年生の校舎を目指す。そして下駄箱に到達。水に浸したように濡れた傘の水気を払い、片手で自分の上履きを取り出す。

湿気の蔓延した廊下を進んでいく。じめじめとした不快な空気を吸って、汗が体中から吹き出てくる。

しかし、確かにそれは不快であり、俺の心に重くのしかかっているのだが。それとは違う所で、もっと厄介な問題を抱えてもいた。

言うまでもなく、彼女のことだ。

他人のことでこれ程悩むのは、あまり経験がない。そんな必要は、全くなかったからだ。

自分に関係のあることにだけ、労力を行使していれば良かった。

それが、今はどうなってしまったのだろう。昨日は遅くまで寝られなかった。

今にして思えば、昨日の自分はおかしかったと思う。頭が熱くなっていたみたいな。何かとんでもないことを考えていた気がする。

殺人がどうとか。死体がどうとか。何かおぞましい想像が頭の片隅に残っているのだ。

その断片のどれもが、今朝から抜けない気だるさの理由なのだ。睡眠不足も当然あるだろうけれど。

俺はそんな自らの身体に鞭打ち、教室へと向かう足を早くする。

階段を登る。湿気で滑りやすくなっているそれを一歩一歩慎重に、ラバーの部分を踏みしめて登った。

二階に辿り着く。そうなれば、目的の場所はもう目と鼻の先だ。

「……」「……」「……」「……」「……」

待っていたのは、喧騒と視線とが形を持ったような光景だった。教室中が、騒々しく落ち着かない。

皆それぞれのグループで固まり、何やら深刻な顔で話している。声

から明らかに動揺が窺える者も少なくない。

自分はそんな光景に疑問を抱きながらも、深く考えることはしなかった。その前に、まず彼女がいるかどうかの確認。

ふう、今日は何もなかったのだろうか。彼女は、できるだけ自分の存在を目立たせないように存在することに努力しているようだった。

席に着く。鞄を机の上に乗せ、そこへ頭を預けて突っ伏す。空いた時間を潰す為に、睡魔へと身を委ねようとした、そのとき。

ガラッ

扉が開く音は荒々しくした。そこから覗いたのは担任の女性教師。それだけならば、いつもより多少早くＨＲが始まることに嘆く者がいるかいないか、そんなことに無駄な思考を割かないかどちらかだっただろう。

明らかに平常を失った顔で。今にも泣き出しそうな表情で入ってきた彼女に、教室内の生徒は皆視線を集中させた。

していた喧騒が一瞬収まり、担任教師はゆらゆらと、力ない歩き方で教壇へと向かっていく。

そして言った。

「もう知っている人も、……いるかも、分かりませんが。……本当に、残念な、お知らせを…しなければ、うっうぅ。ハァ、なり、ません……」

先生、お気を確かに。

後から共に入ってきたのは、生徒指導の中年の男性教師。彼は彼女の肩を支えるように、脇に立つ。

嗚咽を始めた彼女の代わりに、彼がその続きを話す。

「溝口が、昨日亡くなられた……」

周囲のざわつきは、一気に増す。

「やっぱマジ……」「マジで死んだ」「…ヤダコワイ」「殺された？　どんな死に方だろ」「は、殺人なのかよ。殺人事件？　それってやばくね」「事件事件って、まだわかんないし」「俺知ってる奴死んだの初めて」「えーなんか暗い。やめようよそんなの」

俺は、一人その騒ぎからは取り残されていた。クラス中の人間が、何かを知った上で話しているように見える。

しかし、彼女は……巳波だけは俺と同じ状況に置かれているらしく、それを確かめて安心している自分がいた。

溝口が死……。死んだ、死。死亡、殺された、事件、殺人、終末。終了、死んだだと、生きられなくなっただと。死んでしまったなんて、何だ、それは何だ。

ちょっとまて。少しでいいから、お願いだから、何なんだ。死んだってなんだ。亡くなられたって、それは何。

人が死んだ。そういう報告。一人の人間が永久に独りになってしま

ったという事実。

それは現実で、決して夢なんかではない。確かにそこにある現実。触れればそこにある、生々しい当たり前。

現実感を伴うもの。人が一人、死んでしまったのだ。

「……溝口、死んだって」「うわ、マジかよやば」

溝口とは、このクラスに所属している……していた、男子生徒である。背は高く、髪は染められ、性格は荒く、クラスに強い影響力を持っていた人間。

巳波凪に嫌がらせをしていたグループの、リーダー的位置にいた人間である。

溝口とは、話したことはないが、周りからは地味な根暗で通っている筈の自分を良く思っていたわけはないだろう。

いずれ彼の矛先は、自分に向いていたかもしれない。

溝口は死んだ。死んだ、死んでしまった。もう戻らない。もう彼はその扉を開けて、その派手な髪を弄りながら入ってくることはない。

……やった。馬鹿、ざまあみろ、死んだ。地獄イキ、天罰、天罰が下った。神様はいた。いないなんて言ってごめんなさい。本当に、本当にすいませんでした。調子こきました。

神様はちゃんといたんですね。ちゃんと見ててくれてたんですね。巳波を救ってくれたんですね。ありがとう。感謝感激。ありがとう

ございます。

口元に指を這わせると、自分でも驚くくらいそれが横に裂けているのが分かった。自分は悪魔かもしれない。そう思った。

巳波はっ。

彼女はどうだろう。自分を苦しめていた忌々しい人間が永久に消え去った。死んだ。死とは苦痛を伴う結末。痛い痛い痛い苦しい苦しい。

それはきっと死ぬ程痛くて苦しいものだろう。自分を傷つけて苦しませてくれた奴には、それが相応しい。

彼女の席へと視線を送る。巳波凪は果たして青ざめた顔をしていた。それは担任教師に負けるとも劣らない血の気の失せた表情だった。

なぜだろう。もっと喜べよ。嬉しくないのか。

なんでどうしてそんな顔をする。お前がそんな悲しそうだと、俺一人で嬉しくなっているのが馬鹿みたいだ。

だから巳波も笑えよ。もっと笑ってくれ。お願いだから、泣かないでくれよ。なんで泣いてんだよ。泣いて欲しくないよ。好きなんだよ。何で笑ってくれないんだよ。お願いだから、笑って。

そんな、顔を上げろよ。なんで落ち込んでるみたいなんだよ。悪いことしたやつなんか死んで当然だろ。死んだって構わないじゃないか。苦痛にまみれて屑のように捨てられたって構わない。

死ねばいい。生きている価値はない。死ね。

生きていたことを謝れよ。謝りながら死んで、それでようやく許される。

神様はお許しになる。

俺は神様なんて信じてなかったけど、今日この瞬間からそれは変わった。

巳波凪は何もかもから見放されたわけではなかった。

見放されていたわけではなかった。

そう思った。それでも、彼女は……髪の毛で顔が隠れて、見えない。

俯いていて、きっと泣いている。

8／生きているということ

しとしと、窓を打つ雨が多少弱くなってきた。そんな放課後。二人以外教室に誰もいなくても、嫌な沈黙は雨の音が消してくれる。

なのに……こんなときこそザアザア降りになって欲しかった。彼女は一向に顔をあげようとしない。もう限界だった。

「巳波……おい。どう、したんだよ。巳波……」

俺は、彼女が崩れたように起き上がらない机の前に、立って言った。感情に任せて、吐き出した。

「もう、いいだろ。顔をあげろよ。あげて、くれよ。もう大丈夫だって、なんだって。良かっただろうが」

「……」

俺は、そんな彼女の両肩に手をかけた。強く、壊してしまいそうなくらい。力の加減が効かない。

「っっ……」

そうすると、彼女はビクンと上半身をあげ、目の前に俺の顔を確認して目を背けた。

痛々しい表情。それは取り返しのつかない何かを犯してしまったとでもいうような、罪悪感に満ちた顔だった。

「奴は、死んだって。はは、こういうことってあるんだな。天罰って、あるんだな。知らなかったよ。いや信じてなかった。悪いことをしたら、それが自分に返ってくるなんて、大人が勝手につくった妄想だって、思い込んでたけど俺。実際にないわけじゃ、ないんだな。いい気味だ」

当然の報いだ。そうだろう。そうだろうが。

悪いことをしちゃあ駄目だから、法律って物があるんだろう。罰って物があるのだろう。

そう叫ぶ俺は間違っているのだろうか。

なぜ彼女は震えているのだろうか。俺の目を見てくれないのだろうか。

「……ひどいわ」

ボソッと、ともすれば聞き逃してしまいそうな、それでもそんな、彼女の苦痛に満ちた言葉を今の俺が逃すはずがなかった。

「……？　な、なにが」

「ひどいの。最低なの。最悪なのよ……」

彼女はその瞳を逸らしたまま、悲痛を噛み締めるように言った。

「私が、最低なの」

「は……」

言葉の意味が、分からなかった。言っている意味が入ってこない。なぜ彼女がそんな事を口にしなければならないのだ。そうじゃないだろ。最低で最悪なのは、もっと他にいて……

「何、言って……」

「私、わたし……喜んでしまったの」

「……」

「彼が死んだって、あの先生が言ったとき、心の底から、気持ち悪い何かがこみ上げてきて、気付いたら……笑って、いたの」

そんな、でも彼女は。今はどうして。そんな苦しそうな顔を。

「そんな自分が恥ずかしくて、怖くて、……何で、どうしてそんな、私は」

その横顔は、泣いてはいなかったけれど、泣き顔よりも酷い。もし泣くことができていれば、少しは増しだったかもしれない。そんな顔だった。

「人が死ぬことを喜ぶなんて、イヤ……」

頭の中を強い衝撃が走った。鈍器で殴られたような、鈍い衝撃。しかしそれは身体ではなく、心がたてた悲鳴だっただろう。

人が死ぬことを喜ぶなんて、イヤ

彼女はそう言った。一字一句違わなく。彼女はそう、言ったのだ。

俺は耐えきれず、その場でしゃがみ込んでしまった。

俺は、喜んでいた。自分のことが悪魔だなんだと言っておきながら、心の底からくる邪悪なる快感のされるがままになっていた。

人が死ぬ。そんなにもこの世に重いことが、他にあるだろうか。そんなもの、探す方が間違っている。

俺は、自分が恥ずかしくなった。

その場を蹴った。蹴って蹴って蹴って蹴った。

扉を強引に引き剥がし、外に出てからも蹴って蹴って走った。

一瞬だけ見えた彼女の顔が、やはりまだ苦しそうで、それでも蹴った。

後日、俺は服装だけはそのままに、ある施設へとやってきた。

そこは葬式などを執り行う斎場であり、喪服や学校の制服を着た者がたくさん来ていた。

溝口孝史の葬式に、俺は参列していた。別に今更同情が湧いたわけではない。同じクラスである生徒には全員参加が義務付けられているのだ。

ならば彼女も来ているはずだが、探す気にはなれなかった。

会場内では溝口孝史の家族、親戚だと思われる人間が大勢いた。両親、兄弟、祖父母、皆が顔を悲しみでいっぱいにしていて、中には泣き出してしまう姿も見られた。

溝口の母親と思しき女性。背が高く、気が強そうに見える金髪の女性だったが、彼女は夫に始終支えて貰わなければ、立って歩くことも叶わなかったに違いない。

泣いていた。入念にしたであろう化粧が崩れることにも構わずに。周りの視線を集めることも構わずに。

俺は、面を食らって動けなくなってしまった。あんなにも、生きている間に卑劣な所業を働いた溝口が、いなくなったことによってこんなにも悲しむ人間がいるなんて。

あんな奴、死んだって誰も何も思わない。そう決めつけていたのだ。俺は。

それなのに、目の前にはそれと正反対の光景。涙、涙、涙。

つられて泣き出す者。順番に線香をあげる際にも、手が震えて上手くいかない人が大勢いた。

俺の前方右側の席に座っていた巳波、彼女の瞳にも流れるもの。

これが、人が死ぬってことか。俺は、全然わかってなかった。分かったつもりでいた。

死んでいい人間なんて、いないのだ。

いなくなっていい人間なんて、存在しない。悲しむ者がいる限り、思う人がいる限り、死んでいい人間なんて、誰一人としていないのだ。

溝口は最低の人間だったかもしれない。最悪の人間だったかもしれない。

けれど、それがどうしたというのだ。そんなもの、俺からの観点で言っているにすぎない。

独り善がりで言っているに過ぎないではないか。

ちっぽけな俺なんか、この中の、大勢の人々の中に埋もれてしまう。

この涙を否定する資格が、俺にあるのか。

帰り道、自由解散となった俺達は、散り散りに皆の場所へと帰っていった。

施設から最寄り駅へと通じる道路で、彼女に追いつくことができた。

弱々しいその背中は、誰と見間違えることもない。すぐに分かった。

俺は周囲のクラスメート達の視線などないかのように、彼女の下へと近寄っていき、その肩を抱いた。

すると彼女は、一瞬身体を震わせながらも、俺の腕の中で大人しくなる。

温かい。彼女の体温。ちゃんと生きている。人間の温もり。生の証し。これが生きているということ。

好奇の視線とざわめきが起こる中、俺達は二人いつまでも立ち尽くしていた。

お互いの存在を確かめ合うように。その手がするりと逃げていかないように、強く彼女の腕を掴む。

細い腕。それでも、耳をすませれば血液が流れる音が聞こえてきそうだ。

生きている。ああ、良かった。生きている。

俺は、もういつからか忘れていた筈の、本当に久しぶりに、心から涙を流した。

9／決意の告白

既に陽の落ちた暗闇の中、俺はようやく自宅へと辿り着いた。結局、長い間ああしていたらしい。気がつくと辺りは夕焼けの空になっていたのだ。

彼女を自宅まで送り届け、別れを告げて帰路につく頃には、もう暗闇が空を支配し始めていた。

住宅マンションのエレベーターで五階に登り、廊下を進む。ポケットから鍵を取り出しながら。

目的の扉の前に到達。ようやく息が抜ける瞬間だった。

湿気で汗ばんだ制服を洗濯機に放り込み、適当な部屋着に着替える。身体が軽くなったようだ。

こんな時間になってしまった為、夕食はあり合わせで作るしかないだろう。冷蔵庫に何かあった筈だと探す。

作業をしながら、ずっと引っかかっていた疑問を掘り起こす。

溝口孝史は、どうして死んだのだろう。学校側からは、彼の死以外、詳細な情報を明かしてはいなかった。

これは不自然なことではないか。葬式にまで参列したというのに、その人物がどうして、どのように命を落としたのか知らないなんて。

もしも交通事故か何かならば、そう言うと思うのだが。

隠す理由など、何一つないのだから。

そう言えば彼の死が教師の口から明らかになったとき、クラスの連中は口々に言っていたな。事件がどうとか。殺人がどうとか。

あれは一体なんだったのだろう。身体の中を、取り払えない重石がのしかかっているみたいで気分が晴れない。

止まない雨は、止んだ筈ではなかったのか。

翌日、湿気の多い蒸し暑い朝。寝室から這い出し、リビングへと向かい、扇風機をつけた後、テレビの電源を入れると、事の次第は明らかになった。

朝のニュース番組。キャスターが淡々とした口調で話す。

都内の高校で、殺人事件。被害者は男子高校生。犯人は未だ特定せず。

それは紛れもなく自分が通っている高校だった。俺は、そのことに気付くまで、少しの時間がかかってしまった。

殺人事件。この被害者というのは間違いなく彼のことだろう。

殺人事件。彼は、その四文字によって永久に独りになってしまったのだ。

毎日の報道で上げられる痛々しい事件の数々。俺はそれを見て、あ

あ殺人事件って毎日起こるんだな、くらいの感想しか抱いてこなかったと思う。

毎日そんな報道がされることに慣れていて、別に不思議に思うこともなく、ただ日々を過ごしていた。

殺人を犯した犯人は逮捕されるだろうし、家族を殺された遺族は悲しむだろうし、被害者の知り合いは一時の感傷にさいなまれながらも、何時までも止まってはいられないから忘れて先に進むしかないだろう。

そんな風に思っていて、そんな風にしか思っていなかった。思ってこなかった。

実際に自分のすぐ身近でそれが起こって分かった。俺の考えなんか全く的を射ていなかったことに。

そんな簡単なわけがないだろう。簡単に忘れて、簡単に前へ進めるわけがない。

何の罪悪を感じることのなく、無感動にそうしたことができる人間には、俺はなりたくない。

それを教えてくれた、彼女の為にも。

犯人は未だ特定せず。

俺は、自分でも馬鹿なことだと分かる考えを、頭の中で打ち出していた。

平日の朝。忙しく飛び交う人々を横目で眺めながら、俺は駅前の広場にいた。学校の制服ではなく、私服なのは、殺人事件が起こったと正式に報道された為、学校はしばらくの間休校となったのだ。

俺はこんなもやもやした感情を抱えながら、家でジッとしていることに耐えられなくなり、彼女と待ち合わせることにした。

一人の少女が俺に気付き、駆け寄ってくる。俺は手を振り、彼女も手を振り返した。

「……おは、よう。斎田」

「ああ。昨日は眠れたか」

彼女は顔を赤らめて言った。

「……えと、あんまり。考え事してて」

昨日の一件から、二人の間には妙な空気が流れていた。今まであった距離感が、急になくなったみたいに。少しやりにくいな。

「話って、何」

そうだ。俺はそう言って彼女を呼び出したのだった。

「ああ。まずはどっか店に入ろうぜ。雲行きも怪しいし」

今日は朝から雨が降る可能性があると天気予報で言っていた。一応

傘は持ってきていたが、使わないで済むならそれに越したことはない。

巳波と相合い傘……そんな想像をして、少し目がくらみながらも、何とか持ち直し、喫茶店でもないかと歩き始める。

彼女の手には傘はなかった。折り畳み傘を持っているような気配もない。彼女の方も、もしかしたら期待しているのかもしれない。

俺達は最初に見つけた喫茶店に入り、店員に二人と申しつける。窓際の席に案内され、注文をする。俺はブレンド。彼女は、オレンジジュース。

駅前だけあって、中々いい雰囲気の店だった。暗めの店内は、落ち着いて話をするのに適しているだろう。

飲み物がやってくると、俺は本題に入る事にする。

「ニュース、見たか」

「……見た。わたし全然知らなかった」

彼女は、次第に表情を暗くしていき、俺はそんな彼女を見ていたくはなかったが、続けた。

「誰が、殺したんだろうな」

「……誰がって」

犯人は未だ特定せず。警察が動いている筈だし、それならいずれ犯人は逮捕されるのだろうが、そんな考えは頭の中にはなかった。

「溝口を殺したのは、誰だろう」

「……」

今朝のニュースでは、彼は帰宅途中に被害にあったらしい。背後から鈍器のようなもので後頭部を殴打。

苦しむ暇もなく、彼を死に至らしめた。

なぜ、彼は殺されたのだろう。

「……警察は、通り魔の犯行の可能性が高いとか、言ってた気するけど」

「ああ、そう言っていた。けど、何か納得いかなくて」

俺がそう言うと彼女は、しばらく無言で俺を見つめた後。

「……どうしたの？」

そう言った。

「納得いかないって、そんなこと、言ってどうするの。納得なんて、しなきゃいけないの？　もう全部終わったことじゃない」

いや、まだ終わりではない。

「俺、バカなこと言ってただろ」

「え……」

「奴が死んで良かったとか。当然とか。そんなことを。死んでいい人間なんて、いるのかって、ずっと考えたんだ。そんなもんいるわけねえって、答えが出た」

「……答え」

お前が教えてくれたんだ。巳波がいなかったら、俺はまだ気付けなかったに違いない。

「償いなんだ。これは。エゴでもなんでもいい。自己満足だって、分かってる」

俺は、言う。

「犯人を捕まえる」

「捕ま、える？」

当惑する彼女。それは当然だろう。正気の沙汰ではないのだから。素人が殺人事件の犯人を捕まえるなんて。

「俺は、奴が死ねばいいって思ってた。死んでしまえと思ってた。そしてそれが本当にそうなったとき、心の中から悪魔が這い出してきた」

「……」

彼女は、そんな俺の言葉を真剣に聞いていた。

「人が、死ぬことは、痛々しいことだ。命は、尊いものだ。それを今の人間は、忘れかけていたんだ。そんな大切なことを。俺だってそうだったんだ。だから、俺は」

巳波凪に、伝えたい。

「溝口を殺した人間に、言ってやりたいんだ。この大事なことを。言わなきゃならない気がするんだ」

「……そっか」

彼女は、暗い表情を、少しだけ明るくしたような笑顔をつくった。

「なら、そうすればいいよ」

「……ああ、ありがとう」

彼女は、心強い力になってくれるだろう。

ならば現実的に色々と考え始めなければならない。

「でも、学校もないんだよな。ずっと。犯人が通り魔なら、現場で聞き込みでもするしかないのか。本当に、長い道のりだな」

「じゃあ、最初は家に行ってみる？」

「……家って？」

「溝口孝史の、家」

彼女は、そう言った。

１０／隣り合わせ

……ポツポツと、ついに降り出した雨。俺達はそれを口実に、一つの傘の中に収まっていた。

俺はこんなに女性と身近に接するのは初めてで、それはどうやら彼女も同じらしい。ならば少しずつ、慣れていけばいいと思った。

ゆっくりでいいのだ。

そして目の前にあるのは、どこにでもあるような一軒家の住宅。俺達は電車を乗り継いで、ここまでやってきた。

表札を見ればそこには溝口と。

溝口孝史の実家だった。

「何で、場所しってたんだ」

「……一度だけ、連れて来させられたの」

そこから先は、萎れるように言った。

「……強引に、犯されそうになって」

「っ……」

俺は、すぐ傍にある彼女の身体を抱きしめた。そして彼女も俺に身体を委ねる。

「ごめん」

「……うん、いいの。もう大丈夫だから」

大丈夫な筈がない。

「思い出させて悪かった。もう、いいから。もう、嘘とか強がりとかで、自分を塗り固めないでいいから。俺の前では」

「……うん」

俺達は、数分の間、そうしていた。そして少しずつ、離れる。今は先に、まだやらなきゃいけないことがある。

「ていうか、誰かいるよな。両親とか、話しを聞きたいとかでいいのか。友達のふりでもすればいいよな」

「うん、そだね」

インターホンを押す。ありきたりな電子音が数回鳴り、誰かがドアの向こうから近づいてくる気配。そして扉が開く。

出て来たのは、見覚えのある顔だった。

金髪の、背の高い、若く見える女性。俺はその人が泣いていたのを知っている。

溝口孝史の母親だった。

「あの、どちら様……」

俺は、頭の中であらかじめ考えておいた言葉を口にする。

「……ええと、俺達、孝史君の友達、です」

「……そう、ですか」

彼女は、まるで俺達が来たことによって思い出したくない何かを、思い出させられたような、表情をした。

平静を装うとしたのは明白だが、誰の目からもそれは明らか。

「……同じクラスの、斎田といいます」

後ろで聞いていた巳波が、少し苦しそうな顔をしながらも、決意したように前へ出る。

「……巳波です」

「……そうだったの。斎田さんと巳波さん。じゃあ、もしかして葬式に」

「はい。いました」

俺はそう答えた。

「そう、なら……恥ずかしい所を見せてしまったわね」

謝罪するように彼女は言った。しかし。

「そんなことありません。当たり前ですよ。心中お察しします」
巳波が言った。俺も同じことを思ったので、心の中で彼女に感謝した。
「……そうね、ありがとう。じゃあ、あがって貰おうかしら。簡単な物なら、お出しできるわよ」
俺達は、そこで目を見合わせ、お互いに頷き合ってそして俺が答えた。
「はい。お邪魔します」

通されたのは、リビング。そこには所々まだ彼の生活感が残っているようで、どうにもやりきれない。
今俺達が腰掛けているテーブルや椅子も、永久に失われてしまった主人を悼んでいるようだった。
溝口家は四人家族。溝口孝史には兄がいた。葬式で確認している。ということは、四人掛けの、このテーブルが埋まることはもうないのかもしれない。
「……他に誰もいないのかな」
隣で巳波。その疑問には俺が答えられる。

「父親は仕事だろうし、溝口孝史の兄は、見たところ年が離れてたから、もう一人暮らししてるんじゃないか」

「そうなんだ」

彼女は納得したように言った。そこへ一人分の足音がやってくる。

扉が開き、麦茶と菓子を乗せたトレイを持って溝口母は現れた。

テーブルを俺達を挟んで向かい側に腰掛けた。

「どうぞ、二人とも」

「ありがとうございます」

「どうも……」

氷が入ったグラスは、手で掴むとひんやりした。それは何となく死体を連想する。

自分もいつか死ぬときが来る。そのときは、こんな風に冷たくなってしまうのだろうか。

「孝史は、学校でどうしていましたか」

溝口母は、そう聞いてきた。それは、とても答え辛い質問だった。

溝口孝史を、俺はまだ許したわけではなかった。

多分、この先もそれは同じだろう。巳波凪を傷つけた。そのことに変わりはない。

俺は、その母親と今向かい合っている。そのことにはあまり感じることはなかった。

少年犯罪は、それを育てた親の責任だと言うが、きっと皆自分の意志で決めたことだろう。

自分の犯した罪の一端を親に擦り付けているだけだ。人間が間違えるのは、他の誰でもない自分のせいなのだから。

「溝口君は、みんなに慕われていましたよ」

俺が迷っている内に、巳波はそう答えた。言わせてしまった。

俺一人で良かったのに……。嘘を吐かなければならなかったのは……。

「そう……そうなの……」

彼女は、果たしてそれは悲しみからきたものだろうか、迷うような表情を浮かべて巳波の言葉を聞いていた。

自分の息子が生きていた頃の話。決して気持ちの良いものではないだろう。

「……ごめんなさい。今あの子の話は……」

溝口母は絞り出すように言った。

「……すみません」

巳波は、申し訳無さそうにそう言った。顔を伏せて、ああ、俺は何をやってんだ。

彼女にこんなことをさせる為に来たんじゃない。そうじゃない。

「溝口さん。俺達、それでも聞かなきゃならないことがあるんです」

俺はそう言い放った。ここに来て迷いは消えた。

「……何かしら」

「殺された、そうですね。溝口君は」

悲痛。悲壮。そんな顔だった。彼女は、隠しきれずに感情を露わにする。

こんなこと、出来ればしたくはなかったけれど。もう仕方ない。

「……そう、です」

もし、俺の身近な人間が死んだとしたら、俺はどうなってしまうだろうか。明日、姉が死んだとしたら……泣くだろうか。

巳波が死んだら……

「犯人はまだ捕まってないんですよね」

巳波は言う。

「……ええ。警察の人に色々と聞かれたりもしたわ。けれどまだ、

……捜索中、だと」

ただの通り魔事件なら、程なく犯人は捕まるだろう。計画性のない突発的な、感情的な犯行は証拠が残りやすい。現に目撃者の証言もあるらしい。

俺のしようとしていることは、意味なんかないことかもしれない。

「ただ……」

そこで彼女は、含みのあるように言葉を濁らせた。

「……？」

「……ただ、とは？」

「いえ、警察の方が、男子高校生なんて狙う理由がないだろうって」

「……ああ」

犯行現場にはまだ行っていないが、犯行は人通りもある通りで行われた。

犯人が通り魔であるのなら尚更だ。感情的な理由で誰かを傷つけたいのなら、もっと弱い存在を狙えばいい。

言っては難だが、男性より女性の方が狙いやすいだろう。よりにもよって、体力的にも旺盛な、見るからに体格のよい溝口を襲う理由が分からない。

そして現に犯人は、彼の命を奪うことができた。そうか。
犯人は、少なくとも男性。溝口を一撃で倒すことのできる、腕力を持つ者だということにはならないだろうか。
そこで溝口母は言った。
「ごめんなさい、二人とも。もういいかしら。申し訳無いのだけど……もうあの子の話は……」
「すみませんでした。では、もう失礼させて頂きます」
「……そう。ごめんなさいね」
「いえ、お邪魔しました」
俺達は溝口母に玄関まで見送られ、溝口家を後にした。

「あんまり、はっきりとしたことは分からなかったね」
巳波は溜め息と共にそんな言葉を吐き出した。状況に何の発展もなかったことへの憂鬱だろうか。
「……そうだな。まあ、そんなもんだろ。結果を求めてしていることじゃあ、ないんだしな。仕方ない」
見上げれば、雨は小雨になっていた。これくらいなら、我慢できないこともなかったが。

「……」「……」

俺達は、同じ傘の中に収まっていた。

１１／限りあるもの

犯行現場、それは何とも言えない非現実的な言葉だった。

自分はこれまで、そしてこれからもそんな言葉とは関係ないところで生きてきて、生きていくのだろうと信じていたのだが。

それはやはり、人生なんて何が起こるのか分からないということなのだろう。

「……ここが、そうなんだね」

「ああ。ここで、犯行が起きた」

それは、溝口家からさほど離れていない駅までの通り。今はまだ時間にして、陽が出ている頃のはずだが、妙に人通りが少ない。

まあそれは雨が降っているからだろうし、ここで痛々しい事件が起こったからでも、あるのだろう。

「あそこ、……だよね」

巳波が気まずそうにしながらも、ある一カ所を指差した。

そこは、住宅の一軒家が並ぶ通りで、何の変哲もない道の塀。ある一カ所に赤い汚れが付着していた。

赤い汚れが、付着していた。

ここで……まさにここで、起こったのだ。冗談なんかではなく、本当に。

目眩のような感覚に襲われ、一瞬身体を支えられなくなる。

その場に倒れそうになるが、何とか持ち直す。

一つの傘の中にいた巳波は、それを見て「大丈夫？」と声をかけてくる。

近距離だったため、その声は耳に吹きかけられるようだった。

再び襲う眩み。そっちの方が強烈だったとか、そんな馬鹿なことを考えていたら、何か色々なことがどうでもよくなってきて。

「なんかさ、人が死ぬなんて当たり前だろ。毎日テレビでやってるし。誰も死なないなんて、有り得ないし、無理なんだ。なら、やっぱり死ぬしかない。いつかは誰でも、死ぬ、んだよ。だけど……」

俺は耐えきれなくなって、抱え込んだ思いを吐き出すように巳波にぶつけた。

「……だけど、やっぱり、死ってどうにもならないくらい嫌だな」

そこで強制的に人生の幕を下ろされた溝口が、後ろに立っているような気がした。

幽霊がいるのだとしたら、きっと溝口は今叫んでいる。そう思う。

俺だって叫びたい。

「本当、なんで、なんだよ」

「……斎田」

彼女は、そこで一瞬迷うようにしながらも、顔を背けながらも、俺を振り返って言ってくれた。

「私だって、そうだよ」

「私だってそうだし、みんなそう。皆、自分や自分の大切な人がもしもいなくなったらって、たまに考えてしまって、落ち込んだり、塞ぎ込んだり。だからそれは、別におかしいことじゃない」

「……ああ、そう、だな」

自分でも驚くほど素直に、笑うことがてきた。

彼女は薄く頬を染めていて、照れたようになってまた顔を背けてしまったけれど。

「知ったようなこと言って、ごめん」

「そんなこと、ない。すげえ、助かったよ」

「私、その、斎田が苦しむとか、辛いなら……無理しなくても、と思って」

「……俺は、大丈夫」

そうだ。まだ、こんなところで止まる訳にはいかないのだ。止める訳にはいかないのだ。

それにしても、警察とかがまだ現場検証とかを続けているのかもとも思ったが、そんなことはなかった。

付近の住民に配慮したのか。それとも警察は犯人に繋がる有力な何かを既に掴んでいるのか。

ともかくこの場所は、知らなければそうとは分からない位に日常そのものだ。

ここで、あの溝口が何者かによって命を奪われたなんて、信じられないが、それは真実だ。

「まあ、来たからって、何かが分かるとも思わないけれど」

「……初動捜査は、警察がもうやった後だろうしな」

重要な証拠なども、持ち去った後だろう。俺達がここでできることはもうない。

しかし。

「ねえ、一つだけ」

巳波がそう言った。

二人で手を合わせる。もしもこんなことで、溝口の魂だが何だかが安らぐというのなら、と願いながら。

俺達は近くで見つけた花屋で花を買い、ここへと戻ってきた。それは彼女の提案だった。

俺では気がつかなかっただろう。女性らしい気遣いといえる。

置いた花は、虚しく雨に濡れる。梅雨が明けるころには、もうバラバラになってしまうかもしれない。

形なんて、いつかは壊れてしまう。人の命と同じだ。

人生なんて、そんなものだろう。だからこそ、思いだけは届くだろうか。

「溝口のこと、恨んでないか」

俺は、聞いてみた。聞いていいことなのか少し迷ったけれど、俺は聞いた。

「……全然、ではないけど。まだ、少しは残ってる、かな。あんまり思い出したくない感情……」

そうだ。人は人をそんな簡単には許せない。ならば、俺も許しては駄目だろう。

溝口の命を奪った犯人を。許しては絶対に駄目だろう。

俺達は、しゃがんだ姿勢から立ち上がり、再び寄り添いあう。

「今日はもう帰ろうか」

「うん、そだね。雨、降ってるし」

まだ止まない雨。

陰鬱な天気は、まるで終わりを見せようとしない。

俺はもう一度、そこに向き直って立った。

溝口、お前はどうして、死んだんだ。

そんなの知らねえよと、言っただろうか。

「お邪魔、します」

「うん、いらっしゃい。ていうか、楽にしていいよ。誰もいないし」

「……そう、だよな」

場所は、変わってマンションの一室。

この間は前まで来て帰った巳波の一人暮らしの部屋にお邪魔していた。

それにしても片付いていた。やはり女の子だからな。

質素な部屋で、一人で暮らすにはやや大きい一室だった。
ここで巳波は、毎朝起きて毎日寝ているのか。
こんなに広くて、寂しくなったりしないのだろうか。
「はい」
と手渡されたのはバスタオル。もう片方の手にはもう一枚。
「濡れちゃってるでしょ。これで拭いて」
「ありがと」
ありがたく受け取る。いくら傘をさしていたとは言え、一つの傘に二人で入っていたわけで。
色々な所が濡れてしまっている。
バスタオルを頭から被ると、ゴシゴシと擦る。
目の前が暗くなり、そして落ち着く香りがした。
あ、巳波これで身体、拭いてたり、して。
……。
「巳波の匂いがする」
「っはぁっっっ？　ちょ、な、何っ？」

タオルの向こうで、彼女が狼狽える声がした。

「巳波の匂いがする」

「……もう」

ガシッと、掴まれた感覚。温かい感触。それが少し、ほんの少し震えていることに気がついた。

俺は聞いてみる。

「巳波。どうした」

「う、えあっ。べ、別に、大したことじゃ、なくて」

「大したことじゃなくて」

暗闇の向こうから、彼女の声がする。

「危ないことは、しないでね……」

「……ああ、わかってるよ」

分かっている。彼女に寂しい思いはもうさせない。苦しい思いはもうさせない。

「わたし、わたし……斎田がいなくなったら、もう、もう」

その声は、どこか寂しげで、良く聞くと涙が混ざった声。

また、泣かせてしまった。もう、二度とさせるものか。

彼女だけは、俺が。

「巳波、いつまでくっついてる」

「……ん、ずっと」

だから俺は、そんな甘えたような声に参ってしまって、自分の家に帰る気力も失ってしまって。外はまだ雨が降っていて、それはまた一段と激しくなっていて、彼女の家で一夜を明かしたのだった。

１２／苦しくても

そこには、一人の人間が佇んでいた。辛うじて分かる程の、濃い霧の中で。

俺には何故か、それが分かった。

分かってしまった。それはきっと彼だろう。

もうこの世にはいなくなってしまった彼だろうと。

曖昧な残像のような影だったけれど、俺には何故かそれが分かった。

では、何故彼はそこにいるのだろう。

もう居ないはずの彼がどうしてここに……。

そしてふと気付く。その影の横に、もう一つの影があることに。

直前までは、そこには何もなかったはずなのに。

何故だろう、何故だろうと考えていたら、その影は…………

突然急変し、様子を変えた。曖昧としか判別できなかったもう一つの影は、まるで獣のようにも見える俊敏な動きで彼に襲いかかり…………ああううう

うううううううううううううううううううううううううっっっっっっっっっっっっっっっっ？？？？？？？？？？？

獣は彼に襲いかかり、まず後頭部を殴って昏倒させ、そのままのしかかり、身動きを封じたところでさらなる殴打。

殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打殴打ベチャッベチャッベチャッベチャッベチャッベチャッベチャッベチャッ

飛び散る血飛沫。飛び散る脳漿。飛び散る××。

俺は、そこに立ち尽くすことすら叶わずに、深く墜ちていくように、深く深く、沈んでいくように、倒れ…………

「……ぃた。…いたっ。……さいたぁっ？！　……斎田っ？！　斎田っっ？！」

最初に見えたのは、青ざめた顔をした巳波だった。

何もかも分からないままに、判断がつかないままに、いつの間にか荒くなっている息。

動悸が収まらず、俺は暫く声を出すことも出来なかった。

俺は、巳波の部屋の布団の中央で、くしゃくしゃになって丸まっているらしい。何故そんなことになっているのか、すぐには理解できなかった。

「斎田……大丈夫？」

彼女は、パジャマ姿のまま、俺の顔をのぞき込んでいる。それはもう近距離で。

それはもう近距離で……。

「治った」

一瞬で布団から飛び出す。

そのままの勢いでバック宙だって、今ならできる気がした。

「ひ、ひゃあっ」

すると彼女は、俺が飛び出した反動で布団に倒れる形になり、二人の位置関係が逆転していた……。

「い、いた」

可愛らしく瞳をパチパチさせて、布団の上で体制を立て直そうとしている。

そうとしていた……のだが。

俺は、意図的もとい悪意を持ってして、彼女に向かって落下していた。

ダイブインザスカイ、オンミナミである。

彼女の身体にのしかかるような形に、果たしてなったわけだ。

「ちょ、ちょっと…なな、何して……。さ、斎田」

「いや、巳波を補給しようと思って」

布団との間で彼女をサンドイッチするように、挟み込む。

身体を押さえつけ、身動きを封じる。

疲れていたのは本当だった。本当に、その時は俺は限界だったのだ。

そうしてしまうくらい、そんなことをしてしまうくらいに、疲弊していて。

でも。

ペチ、と。

か弱くも、力強く。明確に、はっきりと拒絶を示すように、彼女は俺の頬をテノヒラではたいた。

「……」

「……あ、あの、斎田…」

「ごめん」

「いや、別に、そういんじゃ…なくて。その…まだ」

彼女は、赤くなった顔を逸らして、それでも恥ずかしがっているのが瞭然なくらい横顔も赤くして。

その先を言った。誰もいない部屋の隅を向いて。

「まだ、そういうのは、駄目って言うか……」

「……ごめん」

俺は、布団の中央でうずくまり、体育座りをするようにして、その間に頭を抱えるようにした。

「夢を、見てた」

「……どんな、夢」

彼女はそう聞いてきた。

「溝口が、死ぬときの、光景が……」

そして、再び先程までの記憶を掘り起こそうとすると、それに反応したように。

「っっ、はぁっ…あぁ」

嫌な記憶が頭の中で逆再生されるような、急激な悪寒が走る。

嘔吐感に襲われ、暫くの間、顔を上げることさえできない。苦しい。

誰か、助けてくれ。

「だ、大丈夫っ？　苦しいの？　ああ、ど、どうしたら……」

オロオロと、慌てる彼女。迷子の子供みたいに、どうしていいかわからないみたいに。

パシッと、彼女の腕をとった。

「大丈夫、だから」

強がりでも、偽りでも、俺はそう言うしかなかった。

じゃないと、そうしなければ、彼女がまた泣いてしまう。

また涙を流してしまう。もう枯れる程に彼女は、心から血の涙を流したというのに。

もう彼女を悲しませないと、決めただろうが。

「もう大丈夫だ。もう、大丈夫」

「……ホント？」

「ほんと」

「そう。……それなら……」

彼女は、俺の方を振り向き、少し赤さが引いた顔を見せた。

泣いてはいない。涙を流してはいない。

強い、顔。今まで独りきりで生きてきて、色んな痛みや悲しみや苦しみや悩みを知っている顔。

そして優しさを。知っている顔。

俺はその顔に恋をした。もうどうしようもなく、はっきりと。俺は彼女に、参っている。

「巳波」

もう、言ってしまうことにする。形にしてしまうことにする。

「ずっと前から、あなたのことが好きでした」

曖昧な霧のようだった想いが、形を持つ。触れなかった、見えなかったものが、伝わる。

想いは伝わる。人から人へ。

巳波は、俺を見つめるその眼を一瞬キョトンとさせはしたものの、すぐに笑顔になった。

天使が笑ったように、見えた。少なくとも俺には。

絶対に、彼女を離したくない。だからこうしたのだ。

もう揺らがないために。もうすれ違わないために。

「……はい。嬉しい、です」

布団に座ったまま、二人で言葉を交換。気持ちを共用し、想いを確かめ合う。

そして、お互いに確信した。目の前にいる人が、自分の大切な人なのだと。

もう、苦しいときに、悲しいときに、痛いときに、悩ましいときに、独りきりで抱え込まなくたって、いいのだ。

想いを分かち合える存在が、できたのだから。

かけがえのない存在が、できたのだから。

そして改めて決意をする。巳波の為にも、自分の為にも、必ずやり遂げると。

今回のしがらみに、ケリをつけると。けじめをつけると。

この長い長い雨が上がったら、彼女にもう一度言う。

伝えたいことは、まだたくさんある。伝えきれないくらい、たくさんある。

けれど、その前に、けじめをつけなければならない。

この一連の事件に、終止符をうつのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1282l/

止まない雨

2010年11月17日10時57分発行